奉送祝賀行事に協力を

御神木祭 南木曽で打ち合わせ会

ヒノキの里・きそ

御神木祭に合わせて六月六日に南木曽町内で行われる奉送祝賀行事に向けて関係者の打ち合わせ会が二十日夜、同町商工会館で開かれ、南木曽町商工会を中心に準備を進めていくことを確認した。

打ち合わせ会には町内の神社関係者や関係団体などから約二十人が出席。同商工会の志水弘正会長が「あと二週間と準備時間も少ない。神宮のお祝い行事として関係団体のほか多くの人の協力を」と呼びかけた。

祝賀行事の会場は天白公園に設定。当日は午前十一時半ごろ、上松町内で伐採された御神木を伊勢に運ぶ一行が到着。神事を行い、妻籠陣屋太鼓が奉納演奏を披露しもち投げなどお祝い行事を行う。出発は午後一時すぎを予定している。

打ち合わせでは、行事の段取りや人員、会費、日程などについて説明があった。

御神木の奉送行事について打ち合わせる関係者たち

伊勢神宮 御神木祭 1

神殿、神宝を一新

持統天皇の代から1300年

二十年に一度、伊勢神宮の御正殿（ごしょうでん）をはじめとするすべての社殿を新しく建て直す行事「式年遷宮」。次回の遷宮は二〇一三（平成二十五）年に予定されており、遷御（せんぎょ）に至るまでの三十余りの神事のうち、特に重要とされる三番目の神事「御杣始祭（みそまはじめさい）」が六月三日、上松町の赤沢自然休養林内で執り行われる。神宮遷宮の御用材を刈りだす山を御杣山として、江戸時代から用材が刈り出されてきた木曽地方。千三百年を超える伝統の神事の歴史と御杣山の変遷を紹介していく。

式年遷宮の始まり

伊勢神宮とは内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）の総称であり、皇室の御祖神である天照大御神を祭っている。約二千年前、垂仁天皇の代に、より良いお祭りの場として、伊勢の地に鎮められた。

二十年ごとに遷宮を行う理由には、技術や信仰を伝承するためのぎりぎりの年限であるとか、古代の天皇の宮殿が一代ごとに移されたことに由来するなど諸説ある。一回目の遷宮は天武天皇の代（六八五年）に定められ、持統天皇の代（六九〇年）に執り行われた。

「式年遷宮」では、伊勢神宮の敷地を改め、建物を建て替えるだけでなく、五百二十五種千八十九点に上る装束と武具や楽器、御鏡（みかがみ）など百八十四種四百九十一点の神宝が新調される。建て替えや装束、神宝の新調には、その時代を代表する最高の技術を持った人物が携わり、古式にのっとって作業を行う。平均寿命が現在よりも短かった時代、匠（たくみ）の技を次の世代に伝える上でも重要な意味を持ち、千三百年にわたり伝統技術が継承されてきた。

「御杣始祭」では両宮の御神体を納める御樋代（みひしろ）の材料となる御神木二本（予備材としてもう一本伐採）を奉採。伐り出しには「三ツ紐伐り（みつひもぎり）」と呼ばれるおのだけを使った伝統技術が用いられ、御杣山である木曽でも、遷宮の歴史とともにその技術が受け継がれている。